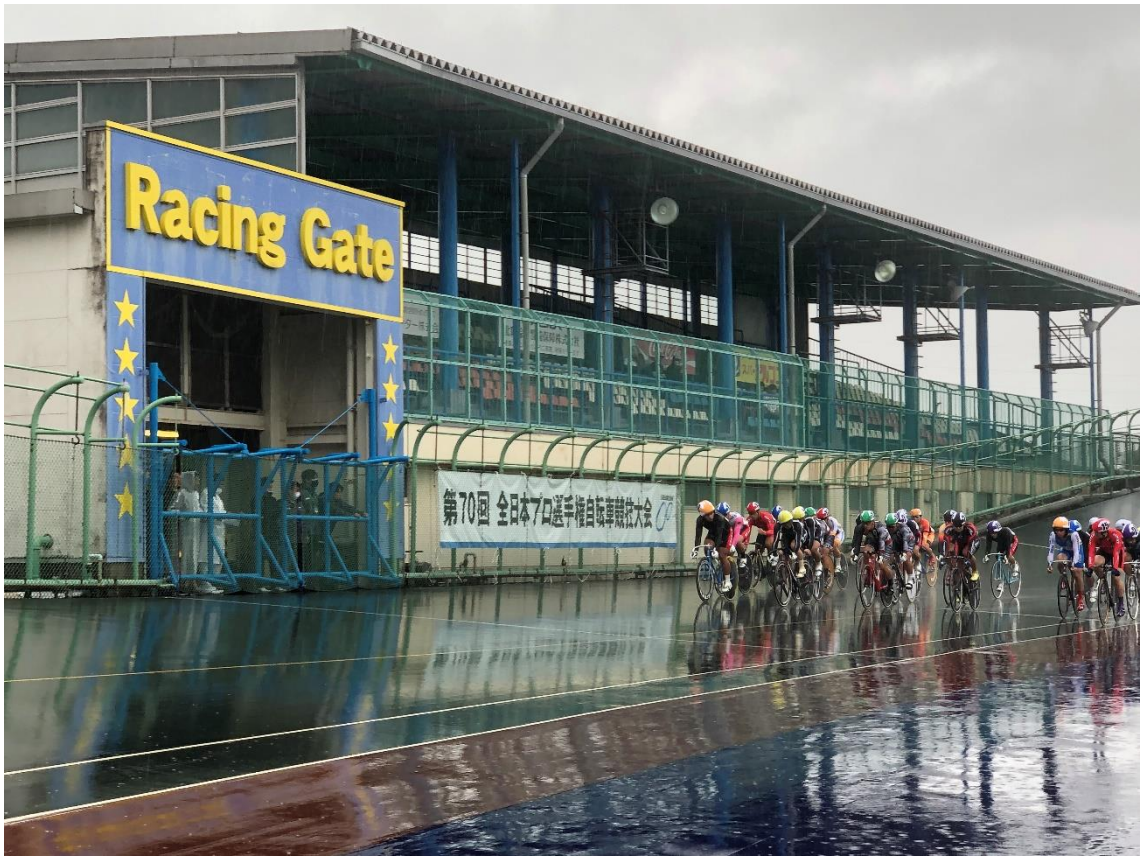
第 70 回全日本プロ選手権自転車競技大会レポート

2023 年 5 月 29 日、第 70 回全日本プロ選手権自転車競技が富山競輪場にて開催された。
新型コロナウイルス感染症拡大を受けて第 66 回松山大会以降開催が中止となっていたが、今回 4 年ぶりに開催された。
また富山競輪場での開催は第 33 回以来、37 年ぶりの開催となった。
当日はあいにくの雨模様であったが、全国から集まった約 170 名の精鋭たちがそれぞれの競技で熱戦を展開した。



ケイリンは山口拳矢（岐阜）が最終 2 コーナーからまくり初優勝。
スプリントは雨谷一樹（栃木）が 1/2 決勝、決勝をストレートで制し初優勝。
1 ㎞タイムトライアルは菊池岳仁（長野）が大会新記録で初優勝。
4 ㎞個人パーシュートは地元の近谷涼（富山）が初優勝。
エリミネイションは小林泰正（群馬）が叔父であり師匠の小林潤二とのマッチレースに競り勝ち初優勝。
4 ㎞チームパーシュートは南関東地区チームが 4 連覇を達成。
チームスプリントは関東地区チームが優勝し、3 走の菊池は 1 ㎞タイムトライアルに続き 2 冠を達成した。

【ケイリン】

ケイリン優勝の山口拳矢

1 位　山口　拳矢（岐阜・117 期）
2 位　吉田　拓矢（茨城・107 期）
3 位　南　　修二（大阪・88 期）

ケイリンは山口拳矢（岐阜）が初優勝を果たした。全プロ大会ではUCIルールにより、6 車又は 7 車立により行われるケイリン。
44 名を 7 組に分け、各組 3 着までが 1/2 決勝へ進出する予選と、各組2着まで又は 3 着の中から抽選で 1 名が勝ち上がる 1/2 決勝を通過した,、眞杉匠（栃木）吉田拓矢（茨城）山田久徳（京都）小松崎大地（福島）古性優作（大阪）南修二（大阪）山口拳矢（岐阜）の 7 名が決勝に進出。激しいタイトル争いが行われた。
決勝は古性が先行。前受けの山口は飛び付いて南と併走になるも古性の後ろを取り切ると、最終 2 コーナーからまくり初優勝を飾った。
この日はケイリン、チームスプリント合わせて 3 本を走った後の決勝だったが、勝負強さを見せつけ初優勝を勝ち取った。

【スプリント】

スプリント優勝の雨谷一樹

1 位　雨谷　一樹（栃木・96 期）
2 位　河端　朋之（岡山・95 期）
3 位　渡邉　一成（福島・88 期）

スプリントは雨谷一樹（栃木）が 1/2 決勝、決勝をストレートで勝利し、初優勝を果たした。
今大会の競技開幕となったスプリント予選の 200mF.T.T.。
悪天候の中、参加 24 人の中で 1 走目を走った雨谷が、いきなり大会新記録となる 9 秒 970 を叩き出し、旧ナショナルチームの河端朋之（岡山）、渡邉一成（福島）を抑え 1 位通過。
続く 1/4 決勝は佐々木悠葵(群馬)が棄権して不戦勝。1/2 決勝は真鍋智寛（愛媛）を連勝で下して決勝へコマを進めた。
決勝は予選 2 位のタイムを出した河端朋之と対決。ここでも連勝で雨谷が制し、スプリント初優勝を収めた。

【1 kmタイムトライアル】

1 kmタイムトライアル優勝の菊池岳仁

1 位　菊池　岳仁（長　野・117 期）
2 位　新田　祐大（福　島・90 期）
3 位　松井　宏佑（神奈川・113 期）

1 kmタイムトライアルは菊池岳仁（長野）が大会新記録で初優勝を果たした。
この種目は 14 名の選手が出場した。最初の出走者である、新田祐大（福島）のタイムは 1 分 3 秒 420 と悪天候ながら好タイムを叩きだすと、後続はこのタイムを超えられずに 8 番目出走の菊池を迎える。菊池は大会新記録の 1 分 3 秒 137 を計測し同種目初優勝。2 位は新田、3 位は松井宏佑（神奈川）と旧ナショナルチーム勢が続いた。

【4 km個人パーシュート】

4 km個人パーシュート優勝の近谷涼

1 位　近谷　　涼（富　山・121 期）
2 位　新村　　穣（神奈川・119 期）
3 位　渡辺　正光（福　島・ 95 期）

8 名の選手が出場した 4 km個人パーシュートは最終発走の近谷涼（富山）が地元の期待に応え初優勝を果たした。
長年日本の中長距離で活躍してきた新村穣（神奈川）が 1 組目で 4 分 38 秒 134 の好タイムを出すと、当種目連覇経験がある渡辺正光（福島）も 4 分 40 秒 294 と新村に及ばずも好タイムを出す。
会場のボルテージが上がる中、最終組に出走した近谷は 1000m、2000m、3000m ともに首位の新村を上回るラップを刻み続け、4 分 33 秒 545 のタイムを叩き出し初優勝を果たした。
近谷はレース後に駆け付けた地元ファンに向けてガッツポーズを見せ、地元の声援に応えた。

【エリミネイション】

エリミネイション優勝の小林泰正

1 位　小林　泰正（群馬・113 期）
2 位　小林　潤二（群馬・75 期）
3 位　舛井　幹雄（三重・71 期）

エリミネイションレースは小林泰正（群馬）が初優勝を飾った。
1 周ごとに最下位の選手が除外（エリミネート）されるこの競技。最下位が 2 名以上の場合はドローとなり次の周へと持ち越されるため、スプリント力、持久力とも必要な競技である。
レースは残り 3 人の時点で、昨年度優勝の舛井幹雄（三重）、過去 3 度の優勝経験がある小林潤二（群馬）、昨年 4 km個人パーシュートで 3 位の小林泰正（群馬）に絞られた。
小林泰正が前々でレースを進め舛井がエリミネートされると、叔父の小林潤二との一騎打ちに。
最終周回は小林潤二が前に出るも小林泰正がゴール前で鮮やかに抜き去り初優勝を飾った。

【4 kmチームパーシュート】

4 kmチームパーシュート優勝の南関東地区チーム
（左から佐々木龍、堀内駿介、小原太樹、嶋津拓弥）

1 位　南関東地区（小原太樹、嶋津拓弥、堀内俊介、佐々木龍）
2 位　九　　州地区（安東宏高、阿部将大、小岩大介、一丸尚伍）
3 位　中　　部地区（近谷　涼、重倉高史、吉川希望、南儀拓海）

4 kmチームパーシュートは、小原太樹、嶋津拓弥、堀内俊介、佐々木龍の南関東地区チームが大会中止を挟んで第 64 回、65 回、66 回に続いて大会 4 連覇を達成した。
本命の南関東チームは新型コロナウイルス感染拡大を受けて中止になる前の第 66 回松山大会にて全プロ大会記録を樹立しており、今回も同メンバーでの出場となった。
2 組目が終了して暫定トップは九州地区チーム（安東宏高、阿部将大、小岩大介、一丸尚伍）の 4 分 28 秒 126。3 組目に南関東地区チームと中部地区チームの対戦となった。
1000m の通過は中部地区チームが南関東チームを上回るものの、周回が進むにつれ南関東チームが逆転。その後も順調にラップを刻み、九州地区チームを上回る 4 分 26 秒 295 を記録し暫定首位となる。最終発走の 2 チームはこのタイムを上回ることができず、南関東地区チームが 4 連覇を達成した。

【チームスプリント】

チームスプリント優勝の関東地区チーム
（左から末木浩二、菊池岳仁、中島詩音）

1 位　関東地区（菊池岳仁、中島詩音、末木浩二）
2 位　中部地区（山口拳矢、志田龍星、森川康輔）
3 位　四国地区（太田竜馬、島川将貴、久米康平）

チームスプリントは関東地区チームが優勝、3 走の菊池岳仁は 1 kmタイムトライアルに続く 2 冠を達成した。
富山競輪場は 1 周 333m のバンクのため、国際ルールとは異なり 333×3 周で行われた。
1 組目の中部地区チームが 1 分 2 秒 314 と好タイムを出すと続くチームはこの記録を超えられない。5 組目の関東地区チームは 1 走末木浩二、2 走中島詩音、3 走菊池岳仁の布陣で出走。2 走までのタイムは暫定トップの中部地区チームに及ばなかったが 1 kmタイムトライアルを制した 3 走菊池がスピードに乗り、逆転首位の 1 分 2 秒 014 を叩き出した。他チームはこのタイムを超えられず関東チームが優勝となった。